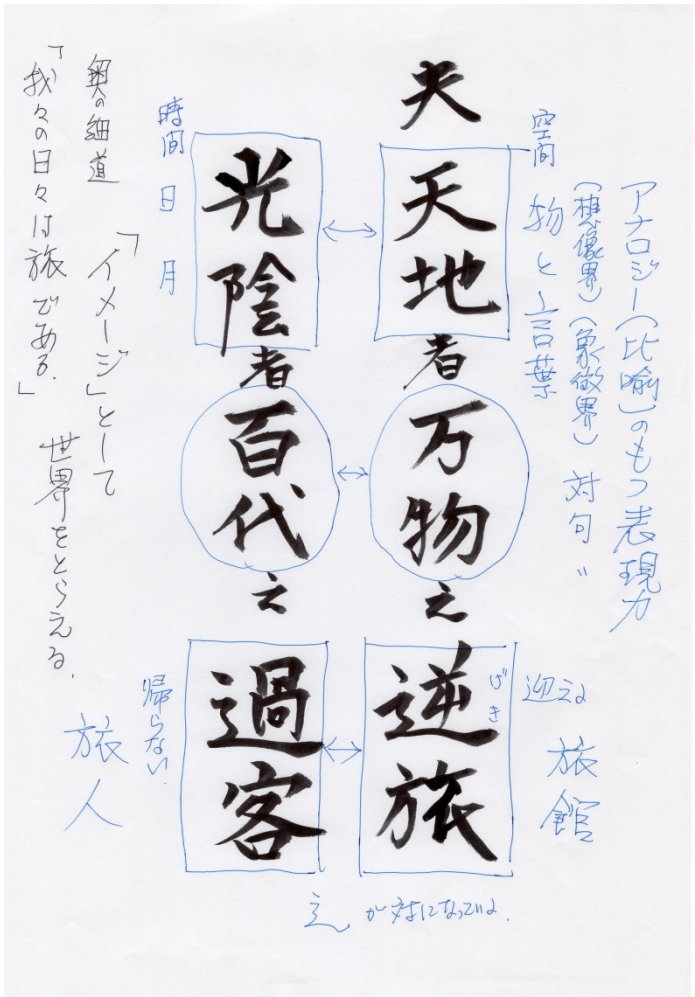


明日死ぬと思つて生きよ

私たちはたとえで物事を理解する
一、宿と客

ことばをシャワーのように浴びている毎日。
そのシャワーを浴びながらもやっぱり言葉の意味を探っている。
毎日和讃を読んでいると、隠喩と対句の表現力のすばらしさに気がつく。
例えばこの詩。



それぞれの言葉の対比とその意味が醸し出す雄大な世界
そういえば旅に出ると宿に泊まるな
この世界自体が宿ということか ↓ **【囲炉裏のそばで】**
じゃあ、私の人生って何にあたるのだろうか

芭蕉も同じ疑問を持ち、その一つの答えを「奥の細道」で表したのではないだろうか
帰ってこない旅人たる私の経験を永遠に書き留めようとしたのではないか
一度しかない私の経験を

法然上人の言葉にこの宿の主人と客人を現した言葉がある

煩惱を心の客人(まろうど)とし、
お念仏を心の主人(あるじ)とせよ

お客だから粗末に扱ってはいけない
でも宿の主人ではない
煩惱はやがて過ぎ去っていく客人である
では主人というのは何だろうか

二、明日死ぬと思つて生きよ

夜一緒に飲んでいた方がその晩亡くなった。

その夜のテーマは「明日死ぬと思つて生きよ。永遠に生きると思つて学べ」だった。

「永遠に生きると思つて学ぶ」ことは具体的に行動化できる。

でも、「明日死ぬと思つて生きよ」ということはできるものではないと、その時感じた。

私にとつて死は、未来（未だ来たらず）であり、将来（将に来るべし）と考えることはできないのではないか。

これがずっと課題として残っていた。

一昨日見たハイデガーの話の中で、「先送りしている自分の死に対して、その死をも含んだ全体の生を生きる」ことの例として「旅」の譬えを聞いた。

旅が心に残るのは始まりと終わりがあからだ。

明日遠足だという前の晩のワクワク感を思い出す。

そこに住んでいる人にとっては当たり前な日常の景色にカメラを向ける。

旅先の出会いも新鮮なこととして心に残る。

なぜそう感じるのか。

それはやがてこの旅が終わることを知っているからだ。

終わりがやってくるからこそ旅の中の経験が新鮮で、一回限りのことであることを強く意識する。

人生も終わりがあからだ。だとしたら旅と同じではないか。

そして、平凡な日常も、そこで起きる出来事も一回限りの経験ではないか。

この一回性において、（旅と同じように）出来事はそれぞれ輝きだす。

明日死ぬと思つて生きるといふことは、

この「いとおいしい日常」を一回きりだと思ひながら生きること。

そしてそう考えると一つ一つのできごとが輝きだす。

これならできそうだ。

三、源左と直次

妙好人源佐さんの最後のエピソードがある。

これを何度も読みながら泣いている。

因幡の方言なのでわかりにくいけど、何度も読んでみると少しずつしみ込んでくる。

直次さんが二人との対話によつてだんだん領解していく仕方が素晴らしい。

「おがだい」は鳥取の方言で「大事なこと」

「ようこそ」は「ありがたい」

「いっかな」は「まったく」

「ねきから」は「そばから」

「ごせ」は「くしてくれ」

源左の友達であった山名直次が床に就いた。

娘のこの「お爺さん、ちったあ念仏となえなはれのう。」

直次「おらあ腹にいらんだいやあ。」

この「お爺さん、聞きたけらや、そこに岡本さんがあっただけ、呼んで御縁に会わせてもらはあ、おがだいなあ。」

直次「うんにや、おら岡本さんに聞きやあでもええいや。源左の方がええいや。」

この「お爺さん、一つ親の話だし、源左さんも岡本さんも、おなじこったあないかいなあ。」

直次「われがそがに聞かしたけらや、源左を呼んで来てごせいや。」

そう云われて娘このは、源左の所に来てみると、源左も大分前から寝ておるとのこと。病床へ来て見舞いを云い、こう伝言した、「直次爺さんも寝とっなはって、お前さんに会いたいちゆうで、来てみただけど。」

源左「おらも、えらあて、よう行かしてもらはんだがのう。会いたいけど何の用だらあかいのう。」

この「寝とつてみらや、後生が気にかかるらしいだいのう。」

源左「気にかかるだつて。」

この「あのやいなあ、お爺さんは寝とつたつて、ちよつとも念仏が出んだけ、念仏となえさして貰らやあ、気がにぎやこうて、ええだけどつて云うだけど、ねきからお爺さんにや、念仏が出んだいのう。」

源左「よしよし念仏は称えんでもええけんのう。助かるにきめて貰つとるだけ、念仏はいつかな後生のたりにやならんだけのう。」

このはそのまま直次爺さんに伝えた。直次は「はあ」と云ったぎりだったが、それから二、三日して、直次が「出てごせ」というので行ってみると、

直次「源左は、そがなことを云つたつて、おらあ、いつかなわけが分らんだいや。」

この「なして分からんだいなあ。」

直次「わつちや、念仏となえとなえちゆし、源左は称えでもええちゆし、わりや助かるにきめて貰つとるだけ心配せえでもええちつたつて、おらあ分らんだいやあ。源左はどがあしとるか行って見て来てごせえや。おらあ、いつかな喜ばれんだが、源左に、喜べるか喜べんか、源左の喜びを聞いてごせえや。」

ここで又このが使いに出た。

源左「源左はえらあて寝とるちつてごせ。」

この「寝とるつて、どがなだいなあ。」

源左「源左もいつかな喜ばれんちつてごせ。直次爺さんはどがあないのう。お爺さんは何だつていやえ。」

この「お爺さんは、どつかにも喜びが出んだつていなあ。」

源左「源左も病いの方がえらいだけ、喜びが出んだがのう。」

ここでこのはそのままを又直次に伝えた。直次「ふん」と云つて思案顔であった。それから又幾日が過ぎて又このに「出てごせ」と云つて来たので行ってみると、

直次「われがせんと聞いて戻つてごしたけど、おらあ源左の云うことが、いつかなわけが分らんだいや。この年になってなりが悪いけど、世話せにやならんけお寺にや参つても、人並に参つとつて、いつかなおらが事だと聞いとらんだけ、分らんだいや。」

この「なして分らんだいのう。」
直次「源左は助かるにきめて貰つとるちったって、そがに親心ちゅうむんが、はや分るか
いや。」

この「なんで分らんだいのう、お爺さん、分る分らんは、こつちが知ったことじゃないだ
け。親さんが助けるって云われるだけ、真受けさして貰うだがのう。わが力じゃ参れる身
にはなれんだけ。」

直次「なら、源左はえらあても、なんまんだなんまんだ喜こんでおったが。まあ一辺行っ
て見て来てごせえや。」

ここで又このは使いに出た。

源左「今更くわしいこたあ知らんでもええだ。この源左がしゃべらいでも、親さんはお前
さんを助けにかかっておられるだけ、断りがたたん事にして貰つとるだけのう。このまま
死んで行きさえすりや親の所だけんのう。こつちや持ち前の通り、死んで行きさえすりや
ええだいのう。源左もその通りだつて云つてごしなはれよ。」

このは之を又直次に伝えた。

直次「源左は又そが云つたかえ。」

それから幾日が過ぎて、又直次から「出て来てごせ。」と云われ、このが出發けて行くと、
直次は頭をかかえて、「おらあ、よんべ、ぽつちりぽつちり思うや。源左は念仏となえでも
ええちつたけど、聞かして貰つてみりや、称えさして貰わにや気が済まんがやあ。称えり
や邪魔になつたろうかい。源左に、ちつくり聞いてみて来てごせや。」

このは爺さんにも念仏の気が出て来たわいと思つて、又源左の所に使いに行つた。

源左「よしよし、出る念仏は抑えでもよし、無理に出ん念仏を引張り出しゃあでもよし、
称えてもよし称えでもよし。邪魔にならんのう。何んにもこつちにやいらんだけのう。
ようこそようこそ、なんまんだぶなんまんだぶ。」

直次はそれから、「なんてなんてようこそようこそ」と喜んだ。

昭和五年二月二十日朝一時頃源左はこの世を去つた。直次は源左の往生を囲炉裡端で聞い
て「源左にぬけられたわい」と云つた。翌二十一日の暮方五時頃に直次も往生を遂げた。

【真宗大谷派円光寺様のサイトより】

直次さんは寺で法話を聞いていて、念仏を称えればいいところへ往けると思つていまし
た。ところが源左さんは念仏は往生のためには役に立たんと言われる。ここから直次さん
の本当の求道が始まります。一緒に三人の対話を読み解いていきましょう。

まず、直次さんの年齢、性格、家族、仕事、思想などを読
み解いてみましょう。

「念仏を主人（あるじ）とせよ」の意味が自ずから浮かん
でくる。



仏暦二五六五年（西暦二〇二二年）一月
[目次へもどる](#)